

本尊の薬師如来は、藤原初期の秘仏で脇侍の持国天・増長天のほか、左に役行者、右に弘法大師、阿弥陀如来があり、目の薬師としても有名である。

なお境内には「眼洗い池」といわれる「琵琶ノ池」がある。病氣平癒祈願の身着り放生に放たれた亀や鯉が長生群遊し、「青龍ノ池」とも呼ばれている。

修験者は大澤寺から神福山へ登り、千早峠から再び奈良県側に下り、草谷寺・地福寺などの修験の寺をへて、金剛山の山腹にある次の石寺いしでら、第二十経塚を目指すのである。



青龍ノ池

三、中葛城山麓の寺院と石寺

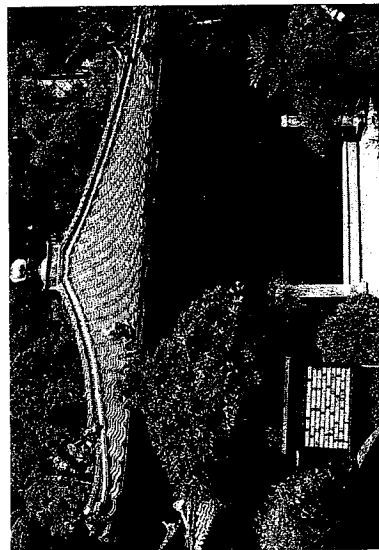
辰尾寺と草谷寺

神福山しんぷくさんから金剛山にかけての峰には、高谷山・中葛城山なかかつらぎがある。両峰ともに標高九三五呎と九三七呎といった金剛山に次ぐ高峰である。

修験の道は、これらの峰を巡行したと思われるが、『諸山縁起』をはじめ、ほとんどの『峯中記』は、これらの南麓の諸寺で勤行また宿泊して金剛山頂をめざしている。

神福山大澤寺しんぷくおほいざわについて、草谷ノ留くさやのりゅう、草谷寺くさやでら、地福寺ぢふくでら、鳳凰寺ほうおうでら、そして石寺いしでらに達している。

伝説として、この辺に悪竜がいて人を害したので、行者がこれを三つに切り、高谷山の南に竜洞塚、中腹のもの草谷寺跡に竜頭塚、麓の現在の草谷寺くさやでら（辰尾寺）に竜尾塚（法文塚）をおさめたといわれ、その塚と碑が建てられている。なかでも草谷寺跡の寺域は、平坦な竹



草谷寺

林や草地となり、古池や古瓦が散乱している。そして、この寺にあった重要な仏像などは、麓の草谷寺に移っている。

草谷寺跡を少し登ったところに高天岸野神社がある。『大和名所図会』に「岸野弁財天と称す」とある式内社である。冷たい湧水がある赤塗りの鳥居から苔むした石段を登りつめると本殿と拝殿がある。五條市北山の里では毎年一二月第一日曜日に草谷寺跡で餅投げがある。

この草谷寺にある本尊薬師如来、不動明王像などは平安後期のすぐれたもので、国の重要文化財として保管されている。ほかに元禄七年（一六九〇）二月の銘が入った役行者像や弘法大師像などがある。

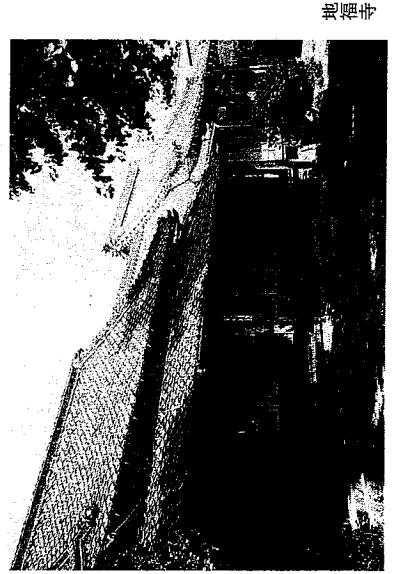
五條市北山の草谷寺から山を越えた久留野の里に地福寺がある。この寺は葛城修験のなかでも金剛山との関係がとくに深い。

行者坊のある地福寺

地福寺は、もと「金剛山行者坊」と号し、高野山真言宗で本尊は地藏菩薩であったが、明治の神仏分離令で金剛山転法輪寺の法起菩薩を請けて本尊とした。そして行者坊の本尊役行者像や不動明王・大威徳明王像を本堂に安置している。

境内には本堂・地藏堂・庫裡が軒を連ねている。庫裡には「行者

①北山村真谷の竹田政治氏の御教示を得た。



地福寺

坊」の額がかり、本堂には、役行者が天々滝で雨を祈った天窟（雨窟）という高さ約六〇センチの竜紋を付けた窟がある。

毎年の本尊会は七月七日で柴灯大護摩が行なわれ、「牛滝さん」と地元でいう牛滝祭りは三月二五日に行なわれる。

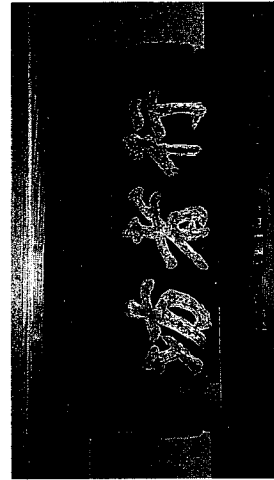
それより北の小和の里には鳳凰寺がある。ここも高野山真言寺院で寺門を入ると本堂庫裡の一棟がある。本尊は阿弥陀如来で室町末期の形式である。寺の裏の墓地には天文年間（一五三三―五）の五輪一石塔が数基ある。

これより金剛山への道をたどると石寺である。

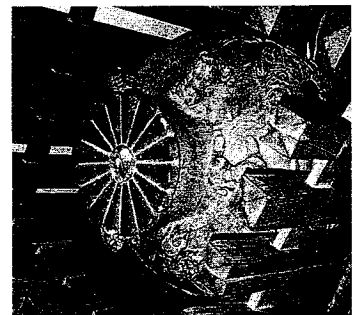
石寺の経塚石

JR和歌山線北宇智駅から伏見峠越えの金剛山登山道を行くと、地元で「高宮さん」という奈良時代の礎石群を残す高宮麓寺跡がある。ここから急な坂道を登ると、古寺があったと思われる石垣が路傍に見える。道の左に大きな白い石が見える。これが石寺の経塚石である。

『葛城峯中記』には、久留野から小和をへて石寺に達している。また加太、向井家文書の『葛城峯中記』には、神福山の経塚から五條市近内町の金剛性寺に泊り石寺に登っている。石寺について『諸山縁



地福寺行者坊の額



地福寺の雨窟

起』をはじめ『峯中記』には、ほぼ幕末の『葛嶺雜記』と同じく、「本堂業師と日光光佛、又弥勒文殊普賢、開山堂御作の神変大士、三十八所明神、経塚石常不輕菩薩品第二十之地」などが記されているが、幕末の智航上人が勤行したところには、堂舎はすでに荒れはてていた様子が歌に詠まれている。

石寺に 緑の色の真木葉たつ、
華の盛りを 見るよしもがな

いまは経塚とされる巨大な花崗岩の自然石が坊跡の中央にたち、金剛山道の雑草の中にひときわ遺標の役割をしているかのようである。

経塚は南面し、高さ約二・八呎、幅二・七呎で、左前に「妙経常不輕菩薩品第二十之地」と昭和六三年（一九九〇）の泉州犬鳴山修験道によって刻された標石がある。付近に聖護院・那智山・犬鳴山・翻書連の碑伝がおかれていた。

石寺の寺坊跡

かつての石寺境内は、雑木と植林地となっているが、いまに残る寺坊の石垣によって、ほぼ南北八〇呎、東西五〇呎と推定できる。そしてこの寺坊跡には、宝篋印塔や一字一石の小石、茶碗・屋根瓦などが

散乱し、寺坊であったことを証明している。石寺の弘法大師像だけが五條市出屋敷町の地蔵寺に残っている。

寺坊より約三〇呎ほど下ったところに石寺の修験僧の墓地がある。平成八年九月に調査したが、石塔二三基があり、壊されたのを含めるともつと多い。

なかでも傾いた小さな五輪塔の年号は、寛正三年（一五三二）一二月と文明九年（一五三九）と最も古く、室町時代にあたる。その後、正徳六年（一七二〇）から文政八年（一八二五）にかけて江戸時代の墓石がつづいている。智航上人の嘉永二年（一八五〇）はその後のことである。そして墓石には、ほとんど「阿闍梨」「法印」と刻され、また「金剛山石寺坊法印善慶遺弟、秀覺覺内房当寺在任四十三年於中位寺閑居二十五年存命七拾五才」と、「金剛山石寺坊」としての修験の寺であった。

『大和名所図会』にも石寺について、「此寺も金剛山七坊の内なり。本尊は石佛の業師如来。これは役行者百濟国より負い来たり給ふと云伝ふ。このゆゑに石寺と号す。境内は方十町余あるよし」とある。

「石寺」の名が、本尊の石仏に由来するにしても、いまは巨大な経塚石が石寺の名称にふさわしく思われるのである。



石寺の経塚石(石)とその前にたつ石碑



②世の人を常に軽んじない菩薩で釈迦を指している。

石寺の墓地



③復刻版四三八頁。

三、金剛山の神と仏

葛城の山神

金剛山の山名について、寛政三年（二五九）の『大和名所図会』には「葛城山」と記し、「高天山といふ又、金剛山とも呼ぶ高さ三百丈山頂に寺院あり」とあり、一〇年後の享和元年（二〇〇）の『河内名所図会』には、「金剛山」と記し、著者、秋里籬島は、大和国では葛城山を、河内国では金剛山がふさわしいと考えたのではなからうか。しかしもとは葛城山と称していたのである。

金剛山は、和泉・金剛両山脈の最高峰、一二五呎で、葛城の盟主である。そして山頂に葛城山の山神、葛木坐神社がある。

元禄二年（六六六）、貝原益軒は『南遊紀行』に、「名も高き葛城の高問の山是なり。甚高し。大峯の外、畿内にも、近国にも、是程の高山は見えぬ。絶頂に葛城の神社有。大社なり。一言主の神と云。役行

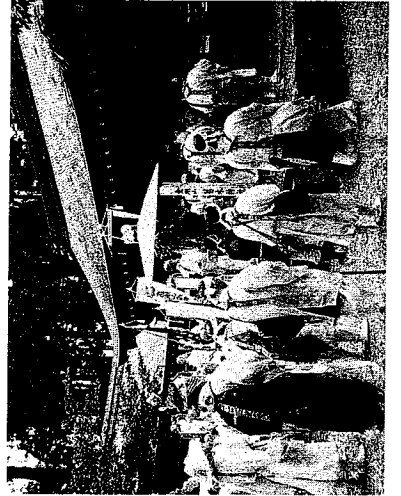
者堂あり。今日はいくもりて、山下遠く見えず。うらめし。山上より二町西に下れば、河内国金剛山転法輪寺あり。役小角開基なり。是山伏の嶺入して修行する所也。僧寺六坊あり。皆家作美大也。大和河内の農民、此神を甚尊崇し、社の下の土を少ばかり取て帰り、我が田地に入れば、稲よく登て虫くはずとて、参詣の人夥し。皆宿坊有て、宿する者多し。檀那にあらざれば宿を借さず」と記している。

葛城の仏

転法輪寺本堂の創立は不詳であるが、金剛山を守護してきた葛城家の家伝では、長香上人のとき、弘和三年（二五三）、山頂の神社仏堂を再興の際に、まず山王権現と本地堂を建て、不動・法起・蔵王の諸仏を祀つたと記されている。さらに延享（二七四〜二八〇）の御改帳にも三尊を本尊としてあげている。このように起源は不詳であるが、葛城山の山の神一言主大神、山王権現と法起菩薩・不動明王・蔵王権現は古くから神仏一体として山頂に祀られていた修験の山とみることができる。

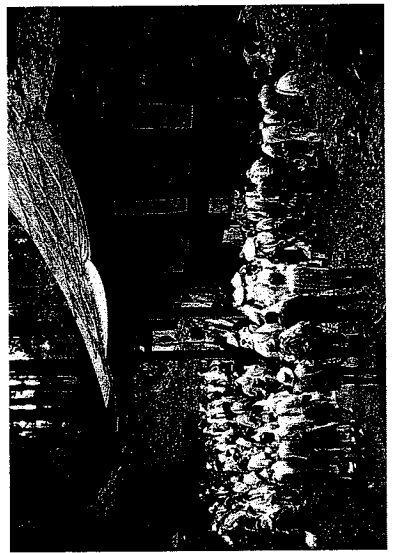
江戸時代の山頂の寺社について『河内名所図会』は「山峰深林にして中に精舎あり転法輪寺最上乘院といふ真言の霊場也。本尊は法起菩薩、不動尊、蔵王権現俱に長七尺ありて役優婆塞の作らせ給ふとか

葛木坐神社



①『益軒全集』巻之七・一二七、八頁・国書刊行会一九七三年。

金剛山転法輪寺



②復刻版七四頁。

金剛山への町石道

なお金剛山への道は、近世の『河内名所図会』に「^⑤当山の本道は森屋村より登る事百四十町、中途に千早村あり、これより山頂まで廿八町巖巖屹立也。また水分より登る事六十六町」とある。大和からは、御所市関屋から朝原寺を通る道と五條市小和から石寺を通る道があった。

これらの江戸時代の道には道標がたてられた。上記の四道とも大体四八町(五二〇〇^⑥)ほどの距離になる。

『^⑥金剛山記』に記された町石の調査をみると、その破損棄却が多く、残る町石数は、関屋道で六基、小和道で一基あり、紀州からの寄進者名が多い。また水分道は尾根筋のため廃道に近く、わずかに三基、本道であった千早道の二基は明暦二年(二五五)のもので仏像が彫られた面白いものである。

この道標は、いずれも大和・河内からの登山道で、本来の修験の道であったかどうかは不詳である。ただ石寺・朝原寺などを経由することから、これらの宿を経て修験者の道であったかも知れないのである。

石寺への道



⑤復刻版七四頁。

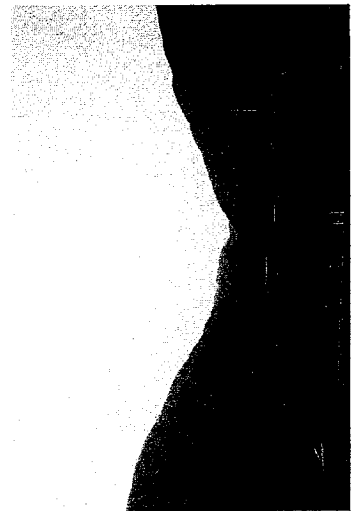
⑥「金剛山の町石」『金剛山記』三六九〜三七四頁・葛木神社社務所一九八八年・発売名書出版。

六、水越峠の大田和地蔵と行者道

関屋の里

金剛山と大和葛城山の鞍部、水越峠越えの道は、大和と河内を結ぶ古道である。この峠の大和側に御所市関屋の集落がある。里のはずれに式内社、葛城水分神社があり、社の前は水越川から分流した水路が関屋の里をぬって流れている。傍らに天文三年(三五五)の古い不動の石仏がある。

室町初期ごろの『葛城峯中記』の「水越宿」水分の註に「行者、河州へ落ル水ヲ和州へ析分ケ給フ故、一言主山伏一宿ス。一言主谷ヲ二十町計登、兎墓也。界那寺屋敷斗也」とある。関屋の里の南東に一言主神社があり、約二〇町上流がこの関屋にあたる。また界那寺跡は、大和葛城山の東斜面に「北千坊」の寺地を残すが、『諸山縁起』に「朝鼻寺または谷の留、南千坊あり、千頭の多輪」と記され、朝原寺



関屋からの水越峠